

インド留学記 その一

インドのしぐれ

(“Ragging”)

東方研究会専任研究員 高橋堯英

東方学院総務・阿部慈園先生とのご縁で、この一文を書かせて頂いております。

私がデリー大学のセント・ステファン・カレッジに入学した一九七四年に、阿部先生もブーナ大学での研究を始められたようで、デリーの日本情報文化センターの所長として滞在されていた大正大学の栗山秀純先生のお宅で一度お会いしていたことを、東方学院で先生にお会いした時懐かしく思い出すことが出来ました。休暇のつど、インド各地の史跡を巡りながら見聞を

広めておられた先生の話が印象的で、「インドを見て肌に感じる」ことが留学生にとつて如何に大切なことを教えて頂きました。

「多様性と統一性」ということがインドについてよく述べられます。私は、「インドは丁度丸いスイカのようなもの」とつねづね思っています。縦に切るか、横に切るか、或は斜めに切るかによつて、さまざまな切り口が表れるように、インドもまた、接し方次第で色々な顔を見せます。決して「これが本当のインドなのだ」など

と断定出来るものはない、と思えてなりません。

私の経験したインドは、主に、首都デリーを中心とし、英語を母国語（？）としている階層のインドであります。まず、デリーのカレッジ・ライフを覗いてみましょう。

デリー大学では、通信教育を除くと、二十程のカレッジで学部の講義が行われています。学生は、これらのカレッジの何れかに入学し、年度末に行われるデリー大学の進級試験・学位認定試験を受け、大学の発行する学位を受けるのです。

私の学んだセント・ステファン・カレッジは、一八八一年にケンブリッジのミッション・カレッジとして設立されました。英國によるインド帝国支配が進み、官僚機構が膨れ上がつて来るところ、インド行政事務官 (Indian Civil Service) として送られて来る英國人の若者たちだけでは間に合わなくなつてきます。そこで、英國政府

は、安く雇える現地民事務官の養成をばかり、高等教育機関を設立していきました。このカレッジも、そのような背景を有するものです。一九八一年には創立百周年祭が祝われ、チャールズ皇太子が訪れ、「インドとイギリスの友好的関係の促進のためには、このようなカレッジが発展して行くことが大切である」という趣旨の講演をされたのを私は記憶しています。

ちなみに、パキスタンの故ジア・ウル・ハク大統領も卒業生の一人で、T字形をした校舎の中央に位置する講堂の、入り口のホールには、シェークスピア・ソサイエティーの一員として演技している学生時代の彼の姿が写真の中に残されています。

今は男女共学となつていますが、当時は男子校で、一千二百名程の学生がおり、その内の四百名程が寮生としてキャンパス内に住んでいました。ここでは寮をホステルと呼ばずレジデン

スと称し、設備と環境の充実に十二分の配慮をしていました。六棟からなる寮では、一年生は二人部屋ですが、二・三年生、修士コースの学生には個室が与えられ、四部屋に一人ずつジップと呼ばれるサーバントがいて、掃除や身の回りの世話をしてくれたのです。一棟に二人の自身の講師が住み込み、また、家族を持った先生たちも寮のすぐ側の教員宿舎に住み、学生と教員との距離をなるべく縮めようという努力が払われておりました。

寮生であることは、一種の特権を有することです、夕方七時半頃の閉館ぎりぎりまで図書館を利用できますし、気楽に先生方に質問するチャンスがあることもその一つです。ですから、進級試験で一科目でも落第するようなことがあれば、次年度は寮に住む権利を剥奪されるのです。つまり、勉強出来る環境を活かせなかつたことへのペナルティーということです。

入学後の最初の一ヶ月間はラギング ("Raging") の期間。要するに、上級生が新入生を徹底的に虐める期間なのです。寮では特に盛んに行われました。新入生は上級生に敬意を払い、言葉の最後には「サー (Sir)」を付けて答ねねばなりません。虐めは嫌なものです、「あいつに、午前二時にミルクティーを届けなければならなかつた」「おれは、昨夜一時間以上もマッサージさせられた」などという不平不満の満ちた会話が新入生の間で交わされるに従い、いつしか広いインドの様々な地域から集まつた学生の間に仲間意識が芽生えだすのが不思議です。上級生にしてみれば、この一ヶ月は、新入生に自分を印象づけ、同時に、以後つき合えるような自分と同じメンタリティーを持つた新入生を探す期間でもあるのです。そして、この一ヶ月のラギングの最終日の深夜、女装した新入生の寮生が先輩たちの前でキャバレー・ダンスの真似事を

披露するという儀式が終了すると、先輩・後輩
という差別が一切取り払われ、一年生が上級生
と対等な一個の存在と認められるのです。

故インディラ・ガンジー首相が非常事態宣言
を発令した年、余りにもひどい「虐め」の結果、
インド各地の大学や士官学校で死者が続出した
ためラギングは禁止されてしまいました。しか

し、私のカレッジでは、適度な「虐め」という
メディアを通じて、様々な文化的背景を持つ学
生たちの結束が図られ、カレッジの構成員とし
ての意識の深化が図られていたのです。伝統を
悪しきものにするのも、素晴らしい伝統とする
のも、結局は人の心、理性に依るのだ、とい
うことなのでしょう。

(つづく)

